

十七世紀バタヴィアからの日本情報

——スハウテン『東インド紀行』における日本関係記述

フレデリック・クレインス

はじめに

十七世紀オランダの旅行記文学の中に、スハウテン (Wouter Schouten, 1638-1704) の『東イン^ヰド紀行』*De Oost-Indische voyagie*. Amsterdam : Jacob van Meurs, 1676. がある。このオランダ西部ハールレム(Haarlem)出身の外科医による旅行記は、著者自身の冒険や訪れた国々とその民族が生き生きと描写され、出版当初だけでなく、現代までも人気が衰えていない。喜望峰、ジャワ、モルツカ諸島、マカッサル、ビルマ、台湾、セイロン島、インド、アラビア、ペルシア、スマトラ、マレーシア、ベンガルについての記述のほかに日本についての記述にも八頁ほどが与えられている。¹⁾ スハウテンは一度も日本に渡航することができなかったが、バタヴィア滞在中に、出島に行ったことのあるオランダ人から日本につい

て様々な情報を得て、それを書き留めたという。そのため、『東インド紀行』は一六六〇年代バタヴィアにおける日本に関する知識を知るのに貴重な資料である。本稿では、『東インド紀行』をオランダの旅行記ジャンルに位置づけると共に、その中の日本関係記述を翻訳・分析することによって、日本に関するどのような情報が十七世紀にバタヴィアからオランダに伝わったかの解明に努めたい。

第一章 スハウテン『東インド紀行』の概説

1 旅行記のジャンルと『東インド紀行』の位置づけ

十七世紀のオランダ航海の黄金時代には、毎年およそ二十隻の船が東インドへ旅立²⁾った。これにともなって、数え切れないほど多くの旅行記が生まれた。イギリスのハクライト・ソサイエティー

(Hakluyt-Society) を模範として、リンズホーテン学会 (de Linschoten-Vereeniging) によってすでに百冊近くの旅行記がシリーズとして注解付きで再版されている。⁽³⁾しかし、これらの旅行記は様々な性質のものからなっており、本稿で論じるスハウテンの『東インド紀行』をはじめ、日本についての記述がある旅行記を位置づけるために、十七世紀オランダ旅行記文学の諸種類を整理する必要がある。この整理のために、バレーント・ヴァン・ハーフトンがオランダの学術雑誌 *Literatuur* (文学) で提案した分類を出発点として利用したが、バレーント・ヴァン・ハーフトンの文学からの視点に対して、本稿では旅行記を史料として捉え、その分類に完全には従わなかった。

十六世紀末から十七世紀にかけて出版された旅行記の多くは、東インドへ出航した船でつけられていた日記にもとづいている。東インド会社設立後、日記をつけることが日常業務の一つとなった。船長のほか舵取りや上席商人、会計士なども日記をつけていた。また、一六九五年より外科医も日記をつけることが義務づけられるが、その前にすでに自主的に日記をつける外科医も少なくなかった。一六五〇年以降の東インド会社の日記は一定の様式を取っていた。オランダとバタヴィアとの航海の間につけられる日記は印刷された横罫や縦罫が付いているものであった。左頁に日付、航路、推定される現在位置、天候などの航海データが記録され、右頁にその日に起こ

った特記すべき事項が書き込まれていた。東インド内を航海する船および各地域における商館の日記には縦罫がなく、様々な出来事や地域について自由に記述できるような形式となっていた。⁽⁵⁾また、東インド会社の公的日記のほかに、体験したことや眼に留まったことを記録した個人の日記もある。

これらの日記類は、未知の世界への好奇心に満ちていた十七世紀オランダの読者層にとっても人気があったため、出版社はそれらを追い求め、大量に出版した。日記に基づいて出版されている旅行記は「旅行日記」というジャンルに分類される。これらの旅行日記は、読みやすくするように出版社側で多少編集されたとはいえ、もともと職業作家ではない一般の人が書いたものであるため、ほとんどの場合、教養ある「文学作品」ではなく、大衆文学に分類される。これらの日記は品質の悪い紙にゴシック体の文字で大量に印刷され、広い読者層に普及した。⁽⁶⁾いくつかの例外を除けば、これらの日記は事柄が長々と列挙されたり、無駄な詳細に渡る記述も多く、その緊迫感のない、そつけない書き方は、現代の読者にとってはつまらない印象を与えるが、当時の読者にとつて、オランダ人が東インドで巻き込まれた災難や戦いは、現代人よりも遙かに身近に感じられる出来事であり、また未知の世界への知識欲を満たすものであったのであろう。

旅行日記の中で最も有名になったものはボンテクー (Willem

Ysbrantszoon Bontekoe, 1587-1657) の『東インド紀行』(一六四六年刊)⁽⁷⁾である。この日記は一八〇〇年以前に少なくとも七〇回は再版されている。ホーヘウェルフが現存している元の日記の原本と出版された日記を比較した結果、航路・推量・風向きなどの航海データは省略され、読者にとって面白い出来事はより詳しく語られ、読者の嗜好に合わせて編集されていることを解明した。⁽⁸⁾ボンテクーは一六〇八年に東インドへ向けて出航し、その航海の途中、火薬をいっぱい積んでいた彼の船が爆発したが、ボンテクーの命はなんとか助かった。その後、ボンテクーは別の船でインドから中国へ行き、一六二五年にオランダに戻った。船が爆発するという「災難」がボンテクーの物語の主題となり、「ボンテクー」はよく災難に合う人の代名詞として使われるようになるほど有名となった。この難破、嵐、飢饉、原住民やポルトガル人との戦いなどの様々な災難との遭遇は、十七世紀オランダの旅行記に数多くみられ、また読者からも求められているものであった。しかし、ボンテクーの名声は数々の試練を乗り越えた日記の内容だけに起因している訳ではない。ボンテクーの文章は生き生きとして読みやすい。また、ボンテクーは観察力が鋭く、小さな出来事からも面白い話を作ることができる才能を持ち合わせていたので、現代の読者をも魅了している。

このように「旅行日記」は毎日の出来事を記述している。面白い出来事がない日は省略されていても、物語は日付順に進む。これに

対して、旅行の概要を記述し、著者の体験や考えを前面に打ち出したものがある。これは「旅行記」と称され、題材は「旅行日記」と同様であるが、様式が異なる。十七世紀にすでにこの区別がなされ、題目には、「旅行日記」の場合は具体的に *journal* (日記) という用語が使われ、⁽⁹⁾「旅行記」の場合は *voyage* (旅行)、*reisbeschrijving* (旅行の記述) のようなより記述的な用語が用いられる。「旅行記」は旅行中に起こった劇的な冒険を中心に扱ったり、またアジアの諸民族や国、地域、都市、風習、宗教などについて詳細な解説を行ったりして、「旅行日記」より様式が自由で内容の幅が広い。旅行記の多くは、旅行後に著述され、訪れた国々のより完全な記述を行うために、著者の体験に他の書籍から得られた情報が追加されている。有名な旅行記の代表としてリンスホーテン (Jan Huygen van Linschoten, 1563-1611) の『東方案内記』(一五九六年刊)⁽¹⁰⁾が挙げられる。この『東方案内記』の出版は十七世紀オランダ人にとつてまったく新しい世界を開いた。⁽¹¹⁾リンスホーテンはこの新しい世界について初めて詳細に記述したオランダ人である。『東方案内記』には日本を含む東インドの各地域や都市、その住民、思想、そして産物などの富について紹介されている。また、同時にポルトガル人の無敵植民地帝国の神話も打ち砕き、オランダ人にも東インドの富が手に届く可能性があると促していた。⁽¹²⁾さらに、この心理的な要因の他に、『東方案内記』に掲載されている実用的な情報や地図はオ

ランダ人による最初の東インド渡航を可能にした。¹³⁾「東方案内記」は長い間、東インドの情報や航路に関する権威書となり、旅行記の模範ともなった。その後に出版された旅行記には次々新しい情報が求められていった。

バーレント・ヴァン・ハーフテンは「旅行日記」および「旅行記」の他に「想像上の旅行記」という分類を提示している。これは実際に東インドへ渡航していない著者があたかも自分が渡航したかのように著述している本である。他の旅行記と比べて、この分類に属するものには、社会的、宗教的、哲学的な要素が強く存在するものが多い。バーレント・ヴァン・ハーフテンはこの分類に旅行記の編纂物も含んでいるが、これらは文学的な作品と質的に完全に異なるので、本稿では「旅行記編纂物」という分類を提示したい。「旅行記編纂物」は東インドには行つたことがないが、旅行記の一次資料や二次資料を用いて、ある地域や民族について包括的な解説を掲載している本を指している。これらの本は多くの場合、本職の作家によって書かれているので、影響力も大きい。有名な例としてモンターヌス (Arnoldus Montanus, 1625-1683) 『東インド会社遣日使節紀行』(二六六九年刊)¹⁴⁾がある。モンターヌスは出版されていなかった東インド会社の出島商館日記という貴重な一次資料を活用することができ、それらの日記を忠実に編集することによって、信頼のおける日本誌を完成させた。

以上の「旅行日記」、「旅行記」、「想像上の旅行記」、「旅行記編纂物」の分類を利用すると、スハウテンの『東インド紀行』は「旅行記」の分類に位置づけることができる。スハウテンは東インドへの渡航の際、日記を付けていたが、帰国してからその日記を編纂し、他の著者からの情報も付け加え、その旅行記を完成させた。スハウテンの記述は時系列に進められるが、スハウテンが立ち寄った各地で起こった出来事やそこで耳にした話でしばしば中断される。

その他にも、各地域の住民の生活や歴史についての詳細な解説が各所で行われている。これらの解説にはスハウテンが実際に見た地域もあれば、他の人から聞いた情報や後で本から得た情報も含まれている。それでも、『東インド紀行』は博学書とはならず、あくまでもスハウテン自身の観察が主である。

スハウテンの旅行記の主題は、当時の旅行日記や旅行記によくみられる「災難」である。スハウテンは数々の危険や災難に出会う。嵐に巻き込まれ、船が沈みそうになった時や、ポルトガル人との戦いで鉄砲や大砲から発砲された玉が耳をかすつて、かろうじて軽い怪我で済んだ時、イギリスの海賊に追いかけられ、捕まりそうになった時など、遭遇する危険は数え切れないが、いつも奇跡的に助かる。また、スハウテン自身の諸冒険の記述の合間に、乗っていた船が沈んだ友人の話や耐え難い苦難を乗り越えた末にそれでも奴隷になった不幸なオランダ人の話をうまく織り込むことにより、スハウ

テンの幸運がより劇的に印象づけられている。その劇的な印象はさらにスハウテンの直接的なスタイルによって引き立てられている。ニーウェンハイスはスハウテンを「嵐を描く専門家」と称している。⁽¹⁵⁾ スハウテンの嵐などの情景の描き方は、表現力に満ちており、読者は嵐の中に立って、まるで自分で体験しているかのように感じるくらいに、スハウテンの持った印象とその表現の間には境がない。スハウテンは見たことをそのまま記しているからこそ、そのような効果を得られるのであろう。この点で、スハウテンの文学的教養の欠如は長所となっている。スハウテンは当時の文学の諸形式に妨げられずに、自分の印象を直接的に伝えることができた。その意味で『東インド紀行』は現代人にとっても読みやすく、旅行日記・旅行記のジャンルの中で、最高の水準に達している作品である。これらの要素ゆえに、スハウテンの旅行記はモンターヌスやデ・フリースのような博学書を好む知識人や上・中流階級の読者層よりもはるかに広い読者層に受け入れられたと思われる。モンターヌスをはじめとする日本を主題とする専門書が知識人や上流階級のみならず普及したのに対して、デ・フリースの博学書はそれより広い読者層に及んでいたが、さらに一歩進んで、スハウテンの旅行記における日本の記述は当時の一般のオランダ人が持った日本に関する知識を表しているといえる。

2 著者スハウテンという人物

『東インド紀行』の著者スハウテンについては、ハールレム(Haarlem)市立古文書館に伝記的情報がある。⁽¹⁶⁾ スハウテンの名は一六三八年九月二日にハールレム改革派教会の洗礼目録に記載されている。父アブラハム・スハウテンは裕福な市民階級の一員であった。スハウテンは十四才の時に外科医の弟子となり、その五年後にアムステルダムで東インド会社の外科医として採用された。⁽¹⁷⁾ オランダで外科医として開業せずに、大きな危険が伴う東インドへの渡航に踏み切った理由について、スハウテンは『東インド紀行』の第一章で、抑えきれない旅行欲および外科の実験的経験を積みたい熱心さを挙げている。『東インド紀行』の中のハールレムの四人の市長に宛てた献辞では、アジアを世界の最も裕福で力強く、そして重要な地域として位置づけ、若い頃からその地域への強い関心を持つていたことが強調されている。

スハウテンは、同時期に『東西インド奇事詳解』(一六八二年刊)⁽¹⁸⁾ を著したデ・フリース(Simon de Vries, 1628-1708)と同様に改革派(カルヴァン派)に属していた。その宗教上の信念は『東インド紀行』の上述の献辞および本文の冒頭から読み取ることができる。東インドへの渡航の切掛けになったのは、神の偉業を拝観するためであるとし、旅の直接的な動機として、旧約聖書詩編者ダビデの言葉「詩編一〇七」を次の通りに引用している。⁽¹⁹⁾



図1 スハウテン肖像画(出典 BREET 2003)

彼らは、海に船を出し、大海を渡って商う者となった。彼らは深い淵で主の御業を、驚くべき御業を見た。主は仰せよって嵐を起こし、波を高くされたので、彼らは天に上り、深淵に下り、苦難に魂は溶け、酔った人のようによろめき、揺らぎ、どのような知恵も呑み込まれてしまった。苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと、主は彼らを苦しみから導き出された。主は風に働きかけて沈黙させられたので、波はおさまった。彼らは波が静まったので喜び祝い、望みの港に導かれて行った。主に感謝せよ。主は慈しみ深く、人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。民の集会で主をあがめよ。長老の集いで主を賛美せよ。

異教徒の宗教については、スハウテンはデ・フリースと同様に強烈に批判している。また、ポルトガル人のカトリック信仰に対しては、当然、改革派の宗教的優越性を伝道している。しかし、それだけにとどまらず、東インド在住のオランダ人の宗教的道徳の低迷についても嘆き、スハウテンの信心深さが窺える。この信心深さは特に、旅の連れが命を落とすのに対して、スハウテンの命を脅かす多くの危険から各回奇跡的に助けられる時の神への感謝に表現されている。スハウテンは『東インド紀行』の序文で次の通りに述べている。

遠く離れた国や王国を見たいという私の熱い願いを実現させ、さらにこれらの多くの旅の中、これだけの多くの苦境、危険や困難な状況から私を何度も慈悲深く救って下さったことについて神、わが主を千分の一でも十分に称賛し、讃えて、感謝することはいつまでもできないであろう。実に海外にいた時に耐え抜いたあらゆる危険、難儀、困難にもかかわらず、私が病氣、船酔いやその他の痛みに倒れないように神は守って下さった。

スハウテンは一六五八年四月十六日にアムステルダムから出帆し、喜望峰を経由して、十月十五日にバタヴィアに到着した。外科医、そして上席外科医としてインドネシア諸島を旅し、またマカッサル

およびインドでポルトガル勢力との戦いにも参加している。スハウテンの東インド渡航については第三節で詳解する。東インド会社での三年間の雇用期間を二期勤め終えたスハウテンは、一六六五年十月十二日に無事にハールレムに戻った。その翌年、ハールレムの外科医ギルドに登録し、一六九二年には理事に昇格し、審査員として新規登録者の入会試験を担当していた。⁽²⁰⁾

スハウテンは外科医業務の傍ら著作活動も行った。スハウテンの処女作は、一六七二年にフランス軍がオランダを侵略したことを切掛けに著された『悲惨な墜落からオランダを勇気づけよう』⁽²¹⁾という詩文体で書かれたパンフレットである。このパンフレットは同年にハールレムのヴァン・レーウエン (Michiel van Leeuwen) が発行した。このパンフレットの中で、スハウテンは、オランダ国民に国家をフランスの侵略から守ることを呼びかけ、オラニエ家の支持を強く訴えている。また、オランダ人が貿易によって世界の富を集めることができたことを称えた後、それらの富は結局、高慢、金銭欲、わいせつなどを生み、オランダを滅亡に導いた、としている。そこから脱却し、国を再建するためには、謙虚で敬虔な生き方しかないという結論にスハウテンは至る。この「災難の年」と称される一六七二年に、スハウテンは自らハールレム市民軍の射撃者代表の一人として武装抵抗に参加している。

一六七六年によく『東インド紀行』が世に出た。帰国から本

書の成立までに十年間も要したことについて序文にその理由が読み取れる。それによると、スハウテンは東インドでの経験が記憶に残るように日記をつけてはいたが、はじめは出版するつもりではなかった。しかし、博学を好む友人に東インドでの出来事や各国についての記述を本にするように勧められ、彼らの博学欲を満たすべく、日記を慎重に校正し、特に各国に関する一般的な情報を書き加えた。外科医業務が忙しく、自由時間が少なかったため、この作業はかなりの年月を要した、としている。また、『東インド紀行』に掲載されている数多くの図版は当時の他の旅行記や博覧書と比較して、極めて写実的であるが、これらは自分で作成したと序文で明言している。

『東インド紀行』以外に、スハウテンの手による二つの医学書がある。一六九四年には、外科医ギルド新会員の指導のために書かれたものとみられる『頭の怪我や骨折』⁽²²⁾が出版された。この手引書が有用であるとの評価がなされたことは、死後の一七二六年に再版が出ていることから窺える。⁽²³⁾ また、その翌年の一七二七年には、『自然な腫瘍論』⁽²⁴⁾という論文も同じく彼の死後に出版された。スハウテンは二度結婚し、二度目の結婚から八人の子供が生まれた。⁽²⁵⁾ この子供たちのためにスハウテンは一七〇〇年に『神の神聖、正義、慈悲、表現しがたい愛の賛美』という宗教的詩文集を著している。この詩文集もまた生まれ、死後の一七三三年に再版されている。⁽²⁶⁾

以上のようにスハウテンの著作のほとんどが一回以上再版されて

いることは、彼の著作がとても人気があったことを物語っている。確かにスハウテンの文体は簡素で読み易く、内容は慎重に熟考されている。また、著者自身は至って謙遜で、すべての著作は誠実な信心深さに満ちている。バタヴィア植民地史の研究者として知られるデ・ハーンが『古いバタヴィア』でスハウテンの人氣ぶりを次の通りに見事に表現している。「旅する東インド会社社員⁽²⁷⁾の最も魅力的なタイプは、いつも陽気で、悪口を絶対に言わず、どこでも歓迎される、若くて好奇心に満ちているハールレムの外科医であるワウテル・スハウテンである」。

3 『東インド紀行』の書誌

スハウテンの『東インド紀行』は、初版以降、現代までオランダやドイツ、フランスで幅広い読者層を魅了し続けていた。初版は一六七六年にアムステルダムでメウルス (Jacob Meurs, 1617-1679) とヴァン・シーメレン (Joannes van Someren, 1632-1678) ⁽²⁸⁾ により出版されている。書誌は次の通り (「」は原文通り)。

Wouter Schoutens Oost-Indische voyagie ; vervattende veel voorname voorvallen en ongemeene vreemde geschiedenissen / bloedige zee- en landt-gevechten tegen de Portugeesen en Makassaren ; belegering / bestorming /

en verovering van veel voorname steden en kasteelen. Misgaders een curieuse beschrijving der voornaemste landen, eylanden, koninckrijcken en steden in Oost-Indien ; haer wetten, zeden, godtsdiensten, costuymen, drachten, dieren, vruchten en planten : als oock sijn seer gevaerlijcke wederom-reyse naer 't vaderlandt / daer in een bysondere harde ontmoetinge met d'Engelsche oorloghs-vloot / soo in Bergen-Noorwegen / als in de Noord-zee. Vergiert met seer konstige koopere platen, soo van de voornaemste steden, als andere aemmerckelijcke saken ; door den schrijver in Indien self geteekent. 't Amsterdam : by Jacob Meurs, op de Keyzers-graft ; en Johannes van Someren, in de Kalverstraat, 1676. Met privilegie.
4°: *-2*2 ; A-2M2 ; (XII), 328, 253, (23) pp. frontispiece, portret, 43 copper plates.

題目の和訳は次の通り。

ワウテル・スハウテンの東インド紀行。多数の重要な出来事や極めて珍しい物語、ポルトガル人およびマカッサル人との陸海



図2 『東インド紀行』初版口絵(出典 BREET 2003)

上での残虐な戦い、多くの重要な都市や要塞の攻囲・襲撃・征服についての記述所収。東インドの最も重要な国、島、王国、都市、その法、風習、宗教、服装、動植物についての特異な記述付。さらに、ノルウェイのベルヘンおよび北海でのイギリス艦隊との激しい抗戦を含む母国への危険な帰還記。重要な都市やその他の注目すべき事項を著者自らが描いたとても精巧な銅版図による装飾。

メウルスは旅行記を専門とする出版社であった。アムステルダム市の記録に掲載されるメウルスの出版物の一つはゴットフリート(Johann Ludwig Gottfried, ca1584-1633)『史的年代記』⁽²⁹⁾のオランダ

語版である⁽³⁰⁾。翻訳者は上述の『東西インド奇事詳解』など、様々な国々や民族について多くの博学書を著したデ・フリースである。また、オラニエ家の英雄伝で名声を得た人気作家モンターヌスの『東インド会社遣日使節紀行』⁽³¹⁾、東インド会社の商人であり、絵師でもあったニューホフ(Johan Nieuhoff, 1618-1672)の『東インド紀行』⁽³²⁾、医家であり、地理学者や歴史家でもあるダッペル(Olfert Dapper, 1639-1689)の『東インド会社遣中国紀行』⁽³³⁾などの東インド関連の著作もメウルス社から出ている。メウルスが元々銅板製作の職人であったことは、『東インド紀行』に掲載されているスハウテン自らの手になる絵を元にした銅板図の品質の高さの説明となる。

ヴァン・ソーメレン社は解剖学書の出版で有名である。バルトリオン『解剖学』⁽³⁴⁾の増補改定版やライレッセの解剖図を載せたビドロの豪華な『解剖学』⁽³⁵⁾のラテン語版およびオランダ語版はヴァン・ソーメレン社から発行されている。また、上述のスハウテンの外科書『頭の怪我や骨折』の出版にも携わっている。しかし、解剖学書を手がける前に、他社と協力して比較的よく売れる東インドについての本も出版していた。その初期の例がメウルスと共同で出版した『東インド紀行』である。また、他の代表作として、ヴァン・ダイク(Johannes van Dijk)と共同で出版したヴァン・レーデ(Hendrik Adriaan van Reede tot Drakenstein, 1636-1691)『インズ・マラバル庭園』⁽³⁷⁾が挙げられる。

メウルスとヴァン・ソーマレンは『東インド紀行』初版と同時にドイツ市場に向けたドイツ語版 *Ost-Indische Reise*. Amsterdam : bey Jacob van Meurs und Johannes van Sommern, 1676. 出している。このドイツ語版をさらに魅力的なものにするために、ヴァン・デル・ハイデ (Fransz Janus van der Heyde) の旅行日記『デル・シエリント戦艦の難破』 *Dem gefährlichen Schiffbruch des Jagt-schiffs Ter-Schelling*. のドイツ語訳も合冊されている。

これはオランダの戦艦デル・シエリントがベンガルの周辺で難破し、難船者たちの後の苦難を描いている典型的な「災難」旅行日記である。ヴァン・ソーマレンは本書をスハウテン『東インド紀行』より一年前に出版していた。⁽³⁸⁾ その後も人気が続ぎ、複数の版を重ね、ストライス (Jan Janszoon Struys, d. 1694) 『モスクワ・タタール・ペルシア・インド紀行』⁽³⁹⁾ にもそのフランス語版が収録されていた。

『東インド紀行』のオランダ語版は十八世紀中に数回にわたって再版される。確認できた諸版の書名、出版地、出版社、出版年は以下の通り。⁽⁴⁰⁾ 版番号は著者が付けた。⁽⁴¹⁾

- 第二版 Wouter Schouten's Reystogten naar en door Oost-Indien. Amsteldam : Andries van Damme, 1708.
- 第三版 Wouter Schoutens Reystogten naar en door Oost-

Indien. Amsterdam : Gerrit Tielenburg en Jan 't Lam, 1740. (一七四五の年記のものも確認した)

- 第四版 Reistogt naar en door OostIndien. Utrecht : M. de Bruyn ; Amsterdam : de weduwe J. J. van Poolsum, G. T. van Paddenburg, A. van Paddenburg, J. van Schoonhoven en Comp., 1775.

以上のように題名は Wouter Schouten's Reystogten naar en door Oost-Indien. とやや変更されたが、内容は第一版と同様である。しかし、一七七五年版は、言葉を当時のオランダ語に訳したものである。

また、オランダ語版およびドイツ語版の他に十八世紀にいくつかのフランス語版も出ている。以下の版をアムステルダム大学図書館およびオランダ王立図書館で確認した。⁽⁴²⁾

- 第一版 Voyage de Gautier Schouten aux Indes orientales. Amsterdam : Estienne Roger, 1707.
- 第二版 Voyage aux Indes orientales. Amsterdam : Pierre Mortier, 1708.
- 第三版 Voyage aux Indes orientales. Amsterdam : s.n., 1724.

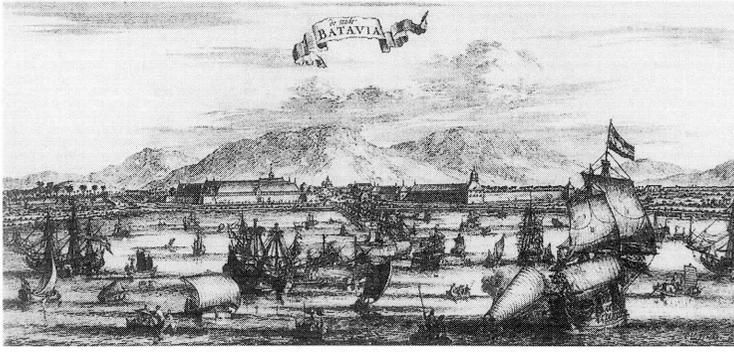


図3 バタヴィアの風景(出典 BREET 2003)

ルーアン版 Voyage de Gautier Schouten aux Indes orientales. Rouen : Pierre Cailloué, 1725.

さらに、スハウテン『東インド紀行』は要約した形で、プレヴォー (Antoine François Prévost D'Exiles, 1697-1763) の大旅行記集

『旅行通史』⁽⁴³⁾の第十六冊(一六八頁〜二二六頁)に Voyages de Gautier Schouten. として収録される。プレヴォー

ーはスハウテンの絵や記述の正確さ、特にフォルモサ(台湾)やマラバル海岸での戦いについての記述の詳細さを評価している。しかし、『東インド紀行』の要約では日本関係記述は省略されている。スハウテンの『東インド紀行』は『旅行通史』のオランダ語版⁽⁴⁴⁾の第十九冊およびドイツ語版⁽⁴⁵⁾の第十二冊にも収録されている。

なお、二〇〇三年に『東インド紀行』の現代オランダ語訳⁽⁴⁶⁾が出たことは、今でもスハウテンの旅行記の衰えない人気を物語っている。この現代語版を除けば、『東インド紀行』には十七〜十八世紀にかけて、確認できた版種だけでも、複数の言語で合計十数版も存在していることとなる。人気作家デ・フリースの『東西インド奇事詳解』には二つの版しか存在しないことを考え合わせると、『東インド紀行』は特によく普及した旅行記であったことが分かる。

4 『東インド紀行』の内容

『東インド紀行』における日本関係記述の位置づけを明確にするために、また日本について記述を残している十七世紀の東インド会社の外科医の業務実態を把握するために、以下に『東インド紀行』に記述されているスハウテンの東インドへの渡航、滞在、帰航を要約する。『東インド紀行』は三巻からなるが、各巻の区別には内容構成上の基準がないように思える。

第一巻の記述はスハウテンのアムステルダム出航で始まる。スハウテンはアムステルダムからカナリア諸島およびヴェルデ岬諸島に行き、そこから大西洋を通過して、トリニダードを経由して七月二十五日に喜望峰に到着した。喜望峰ではオランダ人農民の作った食糧を補給し、バタヴィアに向けて再び出発した。喜望峰までの航海は順調であったが、ここからは様々な困難がスハウテンたちを待ち受

けていた。まず、途中で嵐に巻き込まれ、船が沈みそうになった。運よく難破を免れたところ、今度はペストが発生し、多くの乗組員の命が奪われた。さらに、逆風によってスマトラの西海岸に流され、原住民に助けを求めたところ、戦いとなり、潮流に逆らい、なんとかそこから逃げ切った。食糧もなく進みながら、スハウテンたちは十月十五日によくバタヴィアに到着した。

到着してすぐにスハウテンはジャワ島を旅したかったが、その希望は承諾されず、バタヴィア城の外科医として就任せよとの命令が下された。一月二十三日に中国の正月祝いが行われ、スハウテンはそれを詳細に記述している。しかし、スハウテンの旅行熱は治まらず、バタヴィア城長に粘り強く頼んだ末、モルッカ諸島に向かい、最終的にはアメリカを目的地とする船に配属されることになった。スハウテンは一六五九年に出帆し、ジャワ島北海岸に位置するジャバラを経由し、四月末にアンボンに到着した。アンボンからはさらに北上し、テルナテ島に行き、そこからアメリカに渡る予定であったが、この航海には多くの危険が伴うとの判断がアンボン総督と船長との間で下されたために中止となり、テルナテとアンボンの香料をバタヴィアに運ぶという新しい任務に変更された。アンボンでスハウテンは、アンボンにあるヴィクトリア城に留まるよう命令された。この命令は旅を続けたいスハウテンの意に反していたが、その異議はアンボンの総督に聞き入れられなかった。就任直後、スハウ

テンはオランダ人に敵対していたゴラムの攻撃に参加した。オランダ人と同盟関係にあったアンボン人による攻撃は大成功に終わる。

また、セレベス島に位置している強力な王国マカッサルに対しても同じようにアンボンから出発したオランダの艦隊が攻撃を加える。マカッサルはポルトガルと共謀し、モルッカ諸島におけるオランダ人の貿易独占を打ち破ろうとしていた。スハウテンは二千八百人の兵士の一人として、三十三隻からなる艦隊でマカッサルへ向かう。すでに二隻がマカッサルに進み、そこで六隻のポルトガル船と出会い、マカッサルの真ん前で海戦が行われ、オランダ人はポルトガル人のすべての船を沈める、あるいは乗っ取ることに成功し、マカッサル人にオランダ人の力をみせつける。オランダ艦隊の他の船が到着すると、マカッサルの首都に奇襲攻撃を加え、町の大部分を破壊した。スハウテンの乗った船もポルトガル市街の砲撃に参加したが、沈没したポルトガル旗艦の錨鎖に引っ掛かり、ポルトガル砲列の餌食となった。しかし、その一つの発砲は運よくその錨鎖に当たり、これによってスハウテンの船は解放され、逆にポルトガルの砲列を全滅させた。このオランダの小さな軍隊が得た勝利によって、マカッサルとの平和条約が結ばれることになった。しかし、その後もマカッサルは度々その条約を侵し、オランダ人の貿易独占を打ち破ろうとした。マカッサルの抵抗は一六六九年によくスペールマン

(Cornelis Speelman, 1628-1684) の艦隊によって決定的に鎮圧され

た。それ以降、マカッサルは東インド会社に対抗する力を失っていた。勝利を収めたオランダの艦隊およびマカッサルの使節団と共にスハウテンが十七ヶ月ぶりにバタヴィアに戻ってきたところで第一巻が終わる。この第一巻では、スハウテンは上記の出来事のほかに、訪れた各地域の住民の特徴や暮らしについても簡潔に記述している。

第二巻では、スハウテンはまずビルマの北西部にあるアラカン王国への旅について記述している。アラカンでは探索する時間が充分にあつたので、アラカンの風景や、王の宮殿の豪華さ、一般国民の生活について詳細に解説している。バタヴィアに戻ってから、フォルモサが鄭成功 (Coxinga) に攻撃されたという知らせが届いた。スハウテンは十二隻からなる救助艦隊の準備作業を観察しているが、フォルモサのための戦いに参加する気はなく、バタヴィアに居残る。結局、バタヴィアから出航した艦隊は嵐などにはばまれ、フォルモサのゼーランディア (Zeelandia) 城にたてこもつたオランダ人を充分に救助できないまま、旗艦と数隻はバタヴィアに戻ってしまう。スハウテンはゼーランディア城の落城について生存者からその経緯を聞いて書き留めている。

ここでスハウテンの三年間の契約期間が終わつたが、旅行熱はまだ治まらず、さらに三年間の契約延長を申し込んだ。ジャワ島西部にあるバンドムへの小旅行の後、スハウテンは、インド西海岸のポルトガル勢力を制圧するためにセイロンへ向かう十二隻の艦隊のう

ちの一隻に外科医として勤務するように命ぜられる。セイロンに着してから、スハウテンは内陸まで足を伸ばすことができ、その住民の生活を詳細に記述している。スハウテンの船は、セイロンとインド東海岸で仲介貿易を行った後、コロンボで再びオランダ艦隊と合流し、四千人の兵力でインドのマラバル海岸へ向かった。

インドの武士カーストであるナイロ (Nair) とポルトガル人との同盟軍に対する短い戦いの末、クイロン (Quilon) がまずオランダ人の手に落ちる。オランダ軍は次に海と陸を通つてクイロンから北上し、克蘭ガノール (Cranganor) に進んだ。そこでスハウテンは陸軍に配属された。克蘭ガノールはクイロンよりも防備を固めていたため、早期の勝利とはならず、多くの犠牲者を出した長い包圍戦の末、ようやく落城する。スハウテンは克蘭ガノールの城壁の下で、次々と運ばれてくるオランダ人の負傷者を治療した。オランダ軍は次に、ポルトガル人のインドにおけるゴアに次ぐ重要な拠点であるコーチン (Cochin) に進んだ。しかし、コーチンにたどり着く前に、ポルトガル人の救援に向かったコーチン女王が集結させたナイロの軍隊と戦わざるを得なかった。オランダ軍はナイロ軍を全滅させ、コーチン女王の城の占領に成功したが、ナイロはアヘンの影響でオランダ軍に激突し、オランダ人の間に多くの死傷者を与えた。数々の戦いで、兵士の数を大きく減らされたオランダ軍はコーチンに奇襲攻撃を試みたが、ポルトガル人による激しい抵抗に

合い、最終的には包围をあきらめなければならなかった。スハウテンは多くの負傷者とともにバタヴィアに戻る。

ここでスハウテンは自叙伝的な話を中断し、バタヴィアの北西に位置している国々、つまり、アラビア、ペルシア、インド、セイロンについて詳細な解説を行っている。バタヴィアに戻ってから、青天の霹靂のような知らせが届いた。一六六一年十二月にバタヴィアからオランダへ出発した七隻からなる帰還艦隊のうち、四隻が嵐によつて沈没した。スハウテンによると、これらの船は「教会」のように大きく、前代未聞の豪華な荷物や大勢の乗組員を運んでいた。これらの大型船の沈没はタイタニック号のような悲劇となった。溺死した乗組員の中にはスハウテンと一緒に東インド会社の外科医試験を受けた友人ストフィアーニス (Johannes Stoffians) も含まれていた。

第三巻の冒頭でスハウテンはバタヴィアでのオランダ貿易の繁栄を称えている。スハウテンによると、一六六二年七月のある日にはバタヴィアの波止場に六〇隻ものオランダ船を数えたという。その中でコーチンに対する新たな遠征の準備が進められたが、スハウテンは再び戦闘に参加する気がなく、ベンガルに渡航することを願っている。ベンガル行きオランダ貿易艦隊は九月上旬に出帆した。スハウテンは渡航中の出来事やベンガル湾の嵐に巻き込まれたベンガル行きほかのオランダ船の難破、難破船の生存者と人食い人種と

の戦いや諸体験について詳細に記述している。ピペリ (Pipeli) で絹、綿、アヘンなどの仲介貿易を行っている最中に、アラカン王国からの海賊艦隊がピペリの都市を脅かしていたが、戦いは避けられ、アラカン人の略奪した品物や奴隷の売買が行われる。やがて、スハウテンは四月八日にバタヴィアに戻る。そこには、激しい戦いの末にコーチンが落城したという知らせが届いていた。スハウテンは次に「有名な」日本に渡航すべく、バタヴィア総督に願いを出す、ほかにも多くの希望者がいるので、彼の願いは却下された。三ヵ月後にスハウテンは再びベンガルへ行く船に配属された。この船には未経験で常に酔っ払った船長のぞんざいさのため、船が北西貿易風に捕まり、数回、転覆の危機に直面した。その後もスハウテンと他の乗組員は船長の無知の犠牲となるが、運よくマラッカにたどりつく。ここで、スハウテンはマラッカ、スマトラ、シアムの国々や歴史について詳細な解説を行っている。マラッカで錫を積んでから、ベンガルへの渡航が続行された。しかし、酔っ払い船長の采配の悪さのため、今度は食糧がなくなり、乗組員が飢えに苦しむこととなった。もはや我慢のできなくなったスハウテンは船長と激しい口論となった。反抗の罪に問われ、スハウテンは船の運営会議の前に出頭しなければならなかったが、上席商人の弁護によつて無罪となり、食糧補給方針も見直された。

ベンガルに到着してから、スハウテンはベンガル国民の生活や動

植物について教章にわたって詳細に記述している。また、次に、ベ
ンガル人が奉じるムア教、つまりイスラム教やインド人のヒンズー
教の教えや祭礼について解説している。特に、イスラム教の聖典コ
ーランの内容をキリスト教の聖書と比較し、批判的に分析している。
ベンガルの滞在中、二月十三日にマラッカ経由で日本から渡航して
きたカルフ号がベンガルに到着した。その乗組員から聞いた知らせ
にスハウテンは驚いた。スハウテンが乗船しようとしたが許可を得
られなかった日本行き船は、日本付近で大きな嵐に遭い、乗組員
もろとも三隻が沈没したという。

バタヴィアに戻ると、契約の延長期間がほぼ終わり、故郷が懐か
しくなったスハウテンは帰国することに決め、帰還艦隊のレイゼン
デ・ゾン号に乗船した。ヨーロッパへの旅の記述を始める前に、ス
ハウテンはジャワの人々や動植物について教章にわたって詳細に解
説している。スハウテンは次にオランダへの渡航中に起きた出来事
についても一つ一つ語っている。モーリシヤス島の周辺で帰還艦隊
は大きな嵐に巻き込まれ、スハウテンの乗っていた船の船尾は大き
な波に粉破され、船内に水がどんどん流れ込んできた。船員たちは
必死に新しい船尾を板で組み立て、入ってくる水をポンプで外に出
し、四日間の間、後ろから叩きつけてくる波と闘った。五日目に
嵐がようやく静まり、スハウテンの船は奇跡的に帰還艦隊のほかの
船と遭遇し、ゆっくり沈みかけていたスハウテンの船も助かり、無

事に喜望峰に到着した。

喜望峰では悪い知らせが届いた。イギリスとオランダは戦争状態
にあり(第二次オランダ・イギリス戦争、一六六五年〜一六六七年)、
イギリスの艦隊がオランダの帰還船をドーバー海峡で待ち受けてい
るという。そのため、帰還艦隊はアイルランドやフェロー諸島を経
由し、とりあえずノルウェーのベルゲンに行き、そこでオランダ海
軍艦隊との合流を待つことにした。ベルゲンにはすでにオランダの
船五十隻が避難していた。しかし、これらの船の積荷を狙っている
イギリス艦隊がオランダの海軍よりも先に到着していて、港を封鎖
し、オランダの船に向けて発砲を始めた。オランダ人も限られた武
器で砲撃し返し、激しい砲撃合戦がベルゲンの町の前で繰り広げら
れた。しかし、絶望的な立場に追い込まれたオランダ艦隊に大きな
幸運が訪れた。風はオランダ艦隊からイギリス艦隊の方向に吹き、
発砲の煙が敵の方へ流れていた。そのため、イギリス人側の視界が
悪くなり、彼らの砲撃はオランダ艦隊の上を通り越してベルゲンの
町を直撃した。それに対して、オランダ人側の視界は良く、イギリ
ス艦隊に大きな被害を与えることができた。さらに、ベルゲン城の
方からもイギリス艦隊へ発砲し始めると、イギリス人は慌てて逃走
し、スハウテンたちは助かった。ベルゲンからオランダに向かう途
中、再びイギリスの私掠船に追いかけるが、ぎりぎりのところで
逃げ切ることができた。スハウテンは一六六五年十月九日によ

やくオランダのテクセルにたどり着き、そこから小船に乗り換え、数日後に故郷のハーレムに到着した。

第二章 『東インド紀行』における日本関係記述

1 日本関係記述

『東インド紀行』における日本関係記述は第三巻の第三章の約八頁に収められている。その部分の和訳は以下の通り（日本の固有名詞や特殊名称についてはオランダ語の発音に準ずるように片仮名で表記した）。

その間、有名な日本への旅のために、我々の船は他の何隻かの船と共に準備された。これはとても期待すべき旅になりそうであったが、あまりにも多くの希望者がいたので、バタヴィアに住み、そこで結婚していた人が優先された。そのため、オランダの妻あるいは「白い足を持っていない人」「おべっか使用ではない人」は、彼らのために場所を譲らねばならなかった。私も日本への旅をあきらめなければならなかったが、折しも気分が優れず、重い病気にかかることを懸念していたので、それほど残念には思わなかった。そのため私は、上席外科医を務めるため、ハンリエット・ルイーズ (Henriette Louise) という大きな船に配属された。二人の経験ある

外科医に何をしなければならぬかを伝えてから、私は体調がよくなるまで宿屋に残るべく、陸に上がった。

その間、中国人にできるだけ危害を加え、日本との貿易を続けるために北上する二十一隻の艦隊のために、バタヴィアで皆が参加する断食および祈りの日を行った。ボルト (Borth) 総督の旗の下に編成された艦隊には、以下のような武装を整えた船があった。すなわち、旗艦ムスカートボーム (Muskatboom)、『副旗艦マルス (Mars)』、『ワーペン・ヴァン・ゼーランド (Wapen van Zeeland)』、『テルトローレン (Tertoolen)』、『ズイーリクゼー (Zierikzee)』、『ゼーホンデ (Zehond)』、『ブイクスロート (Buiksloot)』、『ヨンケル (Jonker)』、『ニューウェンダム (Nieuwendam)』、『ロッヘ (Koge)』、『ナールデン (Narden)』、『メリスケルケン (Meliskerken)』、『ヴァールディンヘン (Vardinghen)』、『オヴェルヴェーン (Overveen)』、『ヴリシンヘン (Vissingen)』、『そして小型船ヴィンク (Vink) である。さらに四隻の美しい船ヴェーネンブルヒュ (Venenburg)』、『アムステラント (Amstelland)』、『ペーペルバル (Peperbal)』、『そしてスヒュラーヴェランド (s-Graveland)』があり、これらの船は、『小型船ヴォレンホーヴェ (Vollenhove) (これは既にシヤムを目指して出帆していた)』を追って、日本へ向かう予定となっていた。このお金儲けのできる旅を求めていた乗組員はとても気分をよくしていたが、後に記すように、多くの乗組員にとってはこれが最後の旅になった。

これで私には日本を見に行く機会がなくなり、そして世界から隔離されたこの国の注目すべき特徴を記述する機会が失われたが、この国およびその住民については、何人かのオランダ人と詳細に語り合うことができた。それによって、この大国がなぜこれほど特別なのかについて、全てを私は知ることになった。興味ある読者を満足させるために、ここで短くまとめておこう。

日本は一つの大きな島とその周りの様々な島々から成り立っている。北部の一部はまだ知られていない。北緯三十度から三十八度まで延びているが、ある人はさらに数度、北方に延びていると考えている。周囲はアジアとアメリカとを分離する太平洋に囲まれている。北にはアイナン (Ainan) 海峡、広大なアメリカの西部、東にはノーヴァ・ヒスパニア「メキシコ」、そして東南東にペルーとチリが位置している。そこへは千マイル以上の海を渡って行かなければならない。南にはフィリピン島、ミンダナオ島、モルッカ島、そして他の多くの島々があり、西にはコレアとシナが位置している。

この有名な日本は、もともと多くの王国に分かれていたが、最終的に一つの強大な帝国に発展した。世界中で有名な首都であるイエドは、大君主が滞在している帝国の座であり、輝いている。国は、特に北では十二月、一月、二月の冬の季節は寒く、雪も多く降る。イエドの北方に二十七日間旅すれば、約十一マイルの幅のある海峡に着く。その上「の北方」に、険しい山が多く、人口密度の低いイ

エソが位置している。この地域は、日本人が数度通っているが、食糧不足で最後まで行けず、途中で戻らざるを得なかった。彼らによると、そこで野蛮な、髪の長い人間を見たという。

日本自体はすばらしく、豊かな国であり、常に緑の畑と多くの川を持つ美しい地域から成り立っている。土地は、人々の日常生活に十分な食料を与えている。あちこちに高い山が見られ、その頂は雲の中を突き刺している。その中のいくつかは、おそろしい炎と硫黄の蒸気とを噴き出している。また、銀やその他の金属が採掘される、多くの豊かな鉱山が存在している。さらに王国は、多くの力強い貿易都市があることで有名である。中でも、皇帝のイエド、ミヤコ、サカイ、オーサカ、オコサキ⁽⁴⁹⁾、ナガサキが最も大きい。しかし、これらの都市は、他の都市と同様、城壁で守られてはいない。とはいえ、この世界で有名な日本においては、壮重な城や強い要塞はある。町の状態について、ちょっととした例として、オランダ人が貿易の許可を得ているナガサキについて話そう。ナガサキは、ブンゴ⁽⁵⁰⁾またはシココと呼ばれている日本の島の一つに位置している。北緯三十三度に位置し、到着してくるオランダの船に、海からのすばらしい眺めを提供している。町には異教徒の教会と高い先端を持った建物があり、また、約二百エルの長さ⁽⁵²⁾のある、狭く、ほぼまっすぐな道がある。町は、すばらしい庭園や農地に囲まれており、「その産物の」貿易や経済によって住民は金持ちになり、権力を持っている。

道路はほとんど舗装されていないが、互いに截然と分離され、いくつかの地区に分けられている。家屋には多くの人々が住んでいる。

ナガサキだけでなく他の町でも、夜には道路と地区が塙で封鎖され、番人と提灯によって、強盗、暴動、窃盗に対する見張りが行われている。番人や塙を容易に通ることができる人は誰もいない。医者や産婦でさえ、総督の書面上の許可が必要である。ある地区に火事があると、皆が自分で自分を助けなければならない。逃げることができず、妻子と共に焼け死にそうになっても、誰も出たり入りたりしてはいけない。

巨大な権力のある人口密度の高い町イェドにおいて、日本の皇帝は、世俗的な豪華絢爛さで全てのヨーロッパの君主をも上回る、輝かしい宮廷を持っている。その皇帝に従属している王、男爵、王子、騎士、国の下級官僚も、その官職を営むために信じられないほどのお金を費やす。ただし、それは位にに応じてであり、また、彼らは常に、日本の皇帝の主権の下にある。ちょっとした罪を理由に、彼らは王たちから冠、杖を奪ったり、国から追放したり、殺したり、彼らの全ての所有物を独断的に他の君主に与えたりしている。

日本人は数世紀前に、中国人によって中国から追放されたと考えられている。彼らはトニー⁽³³⁾(君主)、ボンジ(聖職者)、そしてさらに軍人、職人、農民に分類されている。一般的に、彼らは特別に賢くて誇り高く、粘り強く、そして災難を受けた時に辛抱強い。言葉

や日常生活は、謙虚で礼儀正しい。彼らは理解が早く、判断が鋭い。しかし、これらの才能や徳の他に、次のような不徳も示している。つまり、日本人は大の偶像崇拜者である。さらに彼らは無慈悲である。外国人に対してだけでなく、自ら「の国民」に対してもそうである。災難に乗じ、自分を侮辱した人を卑劣な攻撃で殺害してしまう。貧しく、病にかかった不幸な人々にはとても厳しく、無慈悲である。多くの場合、彼らを悲惨に死なせて、彼らの死体を堆肥の山に捨てている。犯罪者は通常、忌まわしい方法で、あるいは非人間的な拷問の後に処刑される。

日本の身分の高い男子は、上着の下に絹のスカートをはいているが、その中には次のような区別がある。老人は、冬には詰め物を詰め込まれ、巧みに縫い上げられた下着をはく。夏には、彼らはより軽く、通常詰め物のない布のきれをはき、それは足下まで垂れ下がりに、腰の周りでリボンで結ばれている。この長い下着の上に、前の開いた、肘までの袖がついた短い上着を着ている。ズボンには、足下まで垂れ下がるほど長くて広く、歩きにくい。

一般の日本人が、通常、このような立派な服を着ているというわけではない。多くは頭の大部分を剃り上げ、指の長さの髪を首の後ろ側で結んでいる。ほとんどの日本人は、口髭あるいは髭がなく、顎を滑らかにしている。彼らの間では他のインド人と同様に、黒い髪と黒い歯がとても美しいものとされている。外出の際、中国

人と同様に、綺麗に刺繍された扇子を手につつ。身分の高い人の場合は、陰を作るための日傘を頭の上に掲げているが、一般の民衆は、暑い時でも寒い時でも、雹や雪の時でも何も被らない。

女性の服の上部は、男性とほぼ同様である。身分の高い婦人、特に貴族の婦人は、東洋の他の女性と同様に、髪を編んでいる。彼女たちは、花柄や金で刺繍された広い絹の上着を着ている。この上着は、首の回りや前側に大きな袖口を持ち、それは交差させて重ね、胸を覆い、腰のところまで大きな紐で固定している。この、彩られた外側の服の下に、足下まで、複数のスカートがぶら下がっている。

これらは様々な色からなる豪華で明るい布でできている。また、様々な長さがあり、末端は後ろに引きずる長い尻尾になっている。左手には扇子を持っている。このようにして彼女たちは、夕方に時折、夫と共に道を歩いている。あるいは籠に乗り、あるいは静かな水上の、遊びのための美しい屋根の付いた小舟に乗っている。このお嬢様たちは、路上にはあまり出ない。しかし、仮に外に出るような場合、彼女たちは特別豪華な姿で現れ、日傘、扇子、花を手にした侍女や従者を連れている。

大体の建物や家は木からできている。偶像寺、修道院などもそうであるが、いずれも端正で巧みな技法でできている。ところどころに石の建物が建っているが、これらは日本で頻発している地震により簡単に崩壊する。貧乏な人々は、小さな家を蘆や枝から編んで、

雨や風を防ぐために粘土を塗っている。日本の家は大体、一階しかない。なぜなら、地震のために重い建物を建てられないからである。斜めに傾斜している屋根は、壁から数フィート外側に出ている。これにより綺麗な回廊ができる。身分の高い人々は、その家の背後に珍しい庭園を持っている。金持ちや貴族は、美しい部屋や広間のあるとても広い建物に住み、そこに繊細に金箔を張った屏風、絵画や他の飾りを誇示している。彼らの建物は、特に火事に弱い。広大な皇帝の首都イェドは、一六五七年四月二日に全焼した。この火事によって、十萬軒以上が失われ、少なくとも同じ数の人間が死亡したと推測されている。⁵⁴

裕福な日本人が結婚する時、新郎と新婦はそれぞれ、ノリモンズ (norimons) で運ばれていく。これは、馬か牛をつないだ日本の馬車である。彼らは近親や友人の行列と共に、特別に作られた高い台へ連れられる。関心を持った数多くの人々が見守る中、彼らは結婚の場である階段を上り、そこでボンジ、すなわち日本の神父が、偶像の前で二人の恋人を結ぶ。これに日本の法や習慣に則った言葉や儀式が伴っている。新婦は既に燃えているランプで松明に灯をとめます。新郎も自分の松明で同じようにする。直後に観客が新郎新婦に対し、お祝いの言葉を叫びかける。これにボンジの祝福が加わる。友人や親族は互いの幸福を祈る。新郎新婦に結婚祝いの贈り物が渡され、新婦の子供時代の玩具が燃やされる。牛が偶像のために焼か

れる生贄として屠殺される。その後、新郎新婦はノリモンスで新郎の家に運ばれ、そこで日本の様々な楽器が演奏される中、厳肅に迎えられる。若者は窓から、旗や吹き流し、その他の祝いの印を出し、人々に向けて花を撒く。結婚の儀式は数日かかり、しばしば一週間も続くことがある。

結婚した日本の男性は、女性よりも結婚において自由である。男性はその気になれば、罰を受けずに、売春婦のもとに通うことができる。それに対して女性は束縛されており、何も言う権利を持たない。男性は、小さな過ちを理由に彼女を自分の手で殺したり、あるいは嫁入り道具一式を持たせて追い出したりすることができる。既婚者同士で浮気をする、残酷な方法で罰せられる。そして浮気を防ぐために、公的な売春婦や売春幹旋屋が許されている。両親は子供を若い間に、多くの場合まだ揺り籠に乗っている時点で婚約させる。

家事や家財道具に関していえば、彼らは木の床を綺麗なマットで覆う。そのマットのいくつかはマットレスとして使うために、詰め物がしてある。食事中は体の下で脚を交差させて座っている。寝る時は枕の代わりに石か木の固まりを頭の下に置く。彼らは住居と服装に関してはとても清潔であり、中国人と同様に二つの小さな棒で食事をし、手では食事に触れない。裕福な人々はよい台所を持ち、様々な料理が塔の形で出される。新しい料理が出る度に、杉やその

他の木からできた新しい食器で出すが、テーブルクロスやナプキンを使わない。料理の時に皆、自分のテーブルを持っている。オランダの味や臭いを嫌っている。

彼らはテーブルマナーには厳しく、礼儀正しい。日本でよく育つ小麦からは、パンではなく、どろどろしたものを作っている。日本人は羊、豚、鷲鳥、鶏を飼育しないで、猪、兎、鹿、たまに牛、そして飼い鳥としては雉、野生の鶏、ウズラおよび野生の雉鳩を好んでいる。ワインは、ブドウの枝からではなく、米から作られる。温かい茶は皆が飲んでおり、とても人気がある。サケは最も純粋な小麦から作られており、日本から輸出され、私はベンガルやその他の場所でもよく飲んだが、スペインのワインに匹敵するほど強いけれど、風の臭いがする。

家財道具は、優美な日本の漆器や塗装が施されている器、綺麗な花を差した大きな花瓶、豪華に中が塗られた筆筒、筆記道具を入れる箱、様々な箱、茶のポットやコップからなっている。壁には刀、槍、漆器や絵画が飾られている。ホールや部屋には、男性と女性の部屋を分けるための美しい引き戸が備えられている。

男性はだれかを自分の家に迎える時には親切で礼儀正しい。夏でも冬でも、のどの渇きを癒すためには、いつも温かい飲み物を飲む。病気や熱のある時には、冷たい水や、草や根から絞出した、煮ていない飲み物を使う。彼らは瀉血を嫌い、病人をそのまま休ませて

おく。

空腹の時、喉が渴いた時、暑い時、寒い時、あるいは他の障害を耐えなければならぬ場合、彼らはとても忍耐強い。産婦でさえ、とても質素な食事をしている。妊娠した女性は、強い包帯で腹を縛っているが、ある女性はそれに比べるととても緩やかな服を着ている。多くの妊娠した女性は、生活困難な時や子を望まない時、強い酒で胎児をおろし、あるいは乳児の喉に足を踏みつけ、窒息させる。特に女兒の場合は、それらの子供を負担と思えば、子供の殺害は完全に自由である。多くの場合は溺死させる。しかし、男の子は特別に指名された従者に預けられ、この従者から皇帝に仕える兵士としての訓練を受ける。

生まれたばかりの子供は通常、冷たい水で洗われ、産着でくるまされることもなく、おしめも付けられない。しかし、富裕な人々は、子供を日本の上着の広い袖の中に丁寧に包み込む。貧乏な人々のところでは、もっと粗末に扱われており、「子供は」寒くても、裸で這い回っている。

金持ちの人々は通常、子供をととても大切に育てている。若い人々は、ボンジのところでは日本の読み書きを習い、さらに様々な技術や科学を学び、武器の使い方を習得している。武器は銃、槍、矢と弓、抜き身の刀である。十二歳になると、武器を持つことができる。多くは、短い刀と長い刀を右側のベルトのところに付けている。彼ら

は剣や短剣に高い価値を与えており、柄は有能な職人によって作られている。騎兵は頭に兜を被り、よく訓練された馬に乗っている。彼らは軍刀、広刃の刀、槍、矢と弓をととても巧みに使う。騎兵や歩兵はよい陣形で、静かにかつ落ち着いて行進する。彼らは一般に、戦いの場では勇敢で、逃げるような恥ずべき行為よりは、死ぬまで戦う方を好む。騎兵も兵士も、日本では尊敬されている。毎年、武器を持った市民が華やかな形でナガサキの道を行進している。

日本人は演劇を好み、様々な楽器を演奏する。オランダ人のトランプや弦楽器については、彼らは不愉快な音だと感じている。黒い服は彼らにとつて祝いの印であり、白い服は喪に際して着る。マントや上着は家を出る時に脱いで、家に戻った時にまた身に着ける。挨拶の時には頭を地面まで曲げて、さらに礼儀正しきにおいて勝ろうとする人々は、曲げながらすばやく靴も脱いでいる。日本に飲み屋や居酒屋は見あたらないが、旅人はよい宿舎を得ている。さらにこの国では、占い師や魔法使い、乞食、世捨て人、らい病者によく出会う。

皇帝の領主や兵士は部下を裁くことができるが、全ての都市には皇帝の代理として犯罪人を罰する法の長がいる。死刑を宣告された貴族や兵士には、腹を切つて自分の命を絶つ名譽が与えられている。しかし、商人、農民、職人（彼らは皆、高い評価を与えられていない）は、法に則つて死ななければならない。窃盗や、博打、虚言、殺人

などは、どれほど小さなものでも、全て死刑によつて罰せられる。犯罪者は、その男性の親族全て（父、叔父、兄弟、息子や孫）に切腹の刑が科せられる。一族はどこにしようが、定められた日時に全員が一緒になるよう時間が計算される。有罪の宣告を受けた人が到着し、切腹が許されたら、彼らは逃亡することなく、その尊い日本の性格を發揮して、定められた時間に最高の衣服を身に着ける。その後、彼らは足を体の下で交差させて座り、別れの食事会の後に素早くかつ巧みに腹を十字に切り、腸やその内容物が直接外に流れ出る。もつと勇敢に自分の喉まで確実に切る人もいる。切腹は様々な方法で行われるが、この機会に最も偉大な処刑人が最も高い名誉を受け

る。日本人はとても賢いが、その一方で偶像や悪魔の野蛮な下僕でもある。ダイロー(davyro)⁽⁵⁷⁾は、聖職者および宗教の長であり、信仰に關する事柄を調整している。彼はほとんど神のように崇拜されている。彼は権力のある都市ミャコ(Myaco)に、素晴らしい宮廷を所有している。彼は名譽の称号や聖職者の官職を与える権力を持っている。ボンジ、すなわち様々な宗派の牧師が数多くいる。その中の最高位の人々は大抵、ずる賢く、卑怯である。彼らは二人の神を崇拜している。すなわち、古い誘惑者アミダ(Amyda)と、パカ(Paca)⁽⁵⁸⁾。他に寺院の中でとても恐ろしい方法で表現された、身分の劣るいくつつかの神々を崇拜している。これらの偶像が崇拜され

ている他、悪魔までも、彼らに禍をもたらさないよう崇められている。彼らは数多くの寺院を持ち、それらはだいたいの木で作られ、それほど大きくはないが、中には大きくて、くびれが入れられ、金箔で裝飾された塔を持つものもある。屋根やその縁は軒まで彫刻で飾られている。多くの寺院は、悪魔や猿、カノン(Canon)という偶像（魚や水の君主）、パカ、アミダやヒヤミス(Chamis)⁽⁵⁹⁾（一年の日の数と同様の像を持っている）、その他の多くの偶像に捧げられている。ボンジは頭を剃り、小枝を編んだ帽子を頭に被り、長いマントを着ている。彼らはボンジの長の下に置かれている。説教しているものもいれば、慎ましく生きて苦行し、修道院に住んでいるものもいる。また、寺院や偶像の世話をしているものもいる。死者を埋めて葬列に同伴し、身分の高い人々の行列の前で銅の鉢を叩き、それで気前のよい褒美を受け取っている。

日本におけるキリスト教の勃興は驚くべきものであったが、その後、キリスト教がこの国から追い出されていく痛ましきも、それに匹敵するほどのものであった。有名なイエズス会士フランシスコ・ザビエル(Franciscus Xaverius)は、ヨハネス・フェルディナンド・ユス(Johannes Ferdinandus)とコスムス・テュレンシス(Cosmus Turensis)に励まされ、最初のキリスト者として説教をするため、一五四九年八月十五日に日本に到着した。彼は多くの日本人を改宗させ、その後、多くのイエズス会士が国全体に分散し、まもなくと

てつもない数の日本人が異教と決別し、ローマ教会の信仰に移った。様々な王がキリスト教に改宗し、そして日本の使節団がローマ教皇の許へ送られるという、これまでに起こったことのない出来事もあった。彼「ローマ教皇」はスペイン王と同様に、手紙や高価な贈り物を持った使節を日本に送り、そこで輝かしくもてなされた。しかし、日本全体をポルトガルに引き渡そうとするイエズス会士のたくらみが露見した時、最初の成功は一気に粉碎された。ポルトガル人は既に、ローマのキリスト教に改宗した複数の王や何千人もの日本人を味方に付けていた。彼らは皇帝やその追従者を容易に殺すことができたはずであったが、計画が漏れ、いずれの地でも知られるようになった時、彼らは可能な限り早く日本から離れ、その一方で、現地のキリスト教徒は、残酷な方法で殺害された。迫害や大量殺戮はすさまじいものであった。年寄りや若者、金持ちや貧乏な人は、一族と共に捕らえられ、打ち首になり、焼かれ、突き刺されて、引き切られ、斬り倒され、焼き網で焼かれ、火で炙られ、窒息させられ、十字架に釘で打ち付けられ、足から逆さに吊された。子供は両親の目の前で縦に斬られ、または沸騰した水に投げ込まれ、残酷な仕打ちであれば、いかなることも行われていた。乳児や小さな子供も見逃されず、たった一人のキリスト教徒がいただけという家でも、完全に滅亡させられた。

この殺戮は特に一六一三年から一六二六年の間に行われ、日本に

外国人や日本人のキリスト教徒が一人もいなくなるまで続いた。疑われた人々は、白状するまで熱で赤くなった鉄を頭や体の他の部分に押しつけられ、拷問され、その後、一族全員に近隣の三世帯の妻子を加えて滅亡させられた。これによって、何千人もの人々が最後までキリスト教に対する信じられないほどの帰依を見せていたにもかかわらず、多くのキリスト教徒は残酷な行いに屈して再び憐れむべき日本の異教に戻った。キリスト教から背教した人々は、許しを得るため、冒瀆的な文章に署名しなければならなかった。このように、最終的に日本ではキリスト教が完全に追放された。ポルトガル人やカトリック教徒は、死刑を科すという脅しの下で、永遠に外国することが禁止された。オランダ人を除く他のキリスト教諸国は日本との貿易を禁止され、オランダにも制約が課せられた。すなわち、たとえどのような事情があっても、日本では福音の教えが伝道され、普及されてはならなかったのである。

日本の皇帝は最初にオランダ人の貿易場所としてヒラド (Hirado) を指定したが、後にそれはナガサキ (Nagasaki) になった。我々の船は、町の入り江のデシマ (Decima) という小島の前の波止場に到着している。海の中にとても巧みに埋め立てられて作られたデシマには、東インド会社の豪華な倉庫や商館長およびその部下たちの洗練された住居を伴ったオランダ商館が輝いている。ここでオランダの船から高貴な品物が陸に運ばれ、この機会に日本人に売

られる。我々の船が波止場に到着し、三発の大砲を撃つと、直ちに兵士や番人の乗った日本の帆船が船に横付けし、オランダ人の氏名、年齢や役職が記録され、陸に持つて行かれる。船が出発する前、乗組員は再び調査を受け、これらの記録が正確に一致していなければならぬ。もし一致しなければ、全員が大騒ぎを始め、欠けている人には死が待っている。

その後、旗が降ろされ、小船や小艇が日本人によって陸に引き上げられ、船が再び出発する時にしか返されない。次の日にボニオイセン (Bonisai) 「番所の役人」⁽⁶⁾ が船上がり、彼らのために運ばれてきた大きなペルシア絨毯の上に座り、あるいは中甲板、ないしは気の向いたところに座る。そこで彼らは、運ばれてきた積み荷を調査し、東インド会社の包み、袋や箱を開けさせる。そのために彼らは、我々が雇った日本の労働者や下僕を利用する。船長はこれらの仕事を見ていることはできるが、命令を下すことはできない。全ての積み荷が記録された後、それらは皇帝に渡される。詩篇、十字架・彫刻・聖人の絵の載っている本、カトリックの宗教的飾り、十字架、ロザリオやオランダのお金は、我々によって事前に樽に入れられ、この樽はすぐに慣習に基づいて日本人に渡される。彼らはこの樽を陸に運び、我々の誰もそれがどこにあるか分からないように隠す。それが返されるのは、出発の時になってからのことである。

火縄、火薬、マスケット銃、小銃、武器、槍、軍刀、その他、人

を殺傷できるものもまた全て日本人によって船から降ろされ、そして重砲は厳密に調査される。船首と船尾は絶えず日本の帆船によって見張られ、我々の船に乗った日本人の密航者は殺される。番人達は、我々が何か不適切なことをすれば、船を直ちに軍隊によって占領するようにとの皇帝の指示を受けている。積み荷は労働者によって日本の船で陸に揚げられ、その後、ハッチが閉められ、皇帝の印で封印される。誰かがこれを破れば、彼は容赦なく、生命に関する全ての希望を捨てざるを得ない。船が必要が生じた場合、たとえば水や薪が必要になった場合、ナガサキの日本の総督に合図をし、必要なものを知らせれば、船に運ばれてくる。

その内、十月頃に行われる、数少ないが有名な売買の定期の日が近づいてくる。遠くから商人たちがナガサキや小さな島デシマに来る。品物の見本は順序正しく商人に見せられ、売買は速やかかつ巧みに行われる。日本の番人たちは、それを見ている間、オランダの商館長によって豪華にもてなされる。この時デシマは屋台やテントで一杯になり、日本の拔群の品物が豪華に誇示されている。この品物は、樟脳、楠の木材、茶、生姜、服、銀、銅、陶器、銀細工、そしてとりわけ様々な漆器の箱、箆筒、他にも何千もの綺麗なものからなっている。これらは我々に提示され、売られ、そして積み荷として船に運ばれ、その後、オランダ人は出発するよう命令を受ける。

どのような風が吹いていても、どのような向かい風があっても、

全てを積み終えたら直ちに海に戻らねばならない。船長や船員が少しでも遅ければ、直ちに日本の帆船が来て錨の鎖を切り、船を少しでも大海の方へ動かそうとする。そこで別れを告げて、旅の続きを我々に任せるのである。

これは信用できる著者や実際に見聞した人々が日本について実際に語ったものの要約である。より詳しいことを知りたい人は、これについてもっと詳細に記述されている資料に当たってほしい。

2 日本関係記述の典拠

以上の日本関係記述のために、スハウテンはカロン『日本大王国志』⁽⁶¹⁾およびモンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』⁽⁶²⁾を大いに利用している。モンターヌスは、日本へ渡航したことがないが、東インド会社のアムステルダム支部の文書館に保存されていた出島オランダ商館日記の写しという貴重な一次資料を活用することができ、それらを忠実に編集することによって、信頼のおける日本誌を完成させた。モンターヌスの著作は十七世紀中、日本についての権威書として多くの著者に参照された。それに対して、カロンはオランダ商館員として長く日本に滞在し、『日本大王国志』は元々バタヴィア総督に提出した日本事情に関する報告書であり、一六四五年に出島オランダ商館長を努めていたハーヘナール (Hendrik Hagenauer) によって編集された形でコメリン (Isaac Commelin)

の『東インド会社旅行記集』に収録され、これもまた日本に関する参考書としてよく利用されていた。

スハウテンが両書を所蔵し、日本関係記述のために利用したのは明らかである。スハウテンはモンターヌスから長崎や江戸の情報、服装、子育て、音楽、宗教、キリスト教の弾圧や明暦の大火に関する情報を得ている。また、カロンからは日本の地理的情報や日本人の起源に関する話を採用している。さらに、建物、結婚、家具、食事はモンターヌスとカロン両方からの情報を利用してしている。しかし、スハウテンはそれらの情報をそのまま転写しているわけではない。カロンやモンターヌスを読んで、その後記憶に沿ってまとめているという印象を受ける。そのため、十七世紀オランダで知られていた日本文化の特徴が無駄なくうまく要約されている。

日本関係記述の中で唯一他の著者に依らないスハウテン独自の情報は、長崎での貿易手順についての記述である。この情報は恐らく、スハウテンが記しているように「この国およびその住民については、何人かのオランダ人と詳細に語り合うことができた」情報であろう。スハウテンはバタヴィア滞在中、多くの外科医や商人との交友関係を持っていたが、その人たちの中には日本に渡航し、出島で過ごした人も少なくなかったはずである。スハウテンに日本についての情報を与えた人を特定することは難しい。出島に行ったことがある人であり、『東インド紀行』に言及されている人は二人だけである。

一人目はスハウテンが喜望峰で親しくなったリーベーク総督 (J. B. van Riebeeck, 1619-1677) である。リーベークは外科医として東インド会社に就職し、一六四〇年代に出島で働いていた。もう一人はルーニウス婦人 (Juffrouw Loenius) である。フォルモサが鄭成功に攻撃された時に、そこにいたルーニウス婦人は百七十人のオランダ人と共にスグラールフェランド戦艦 (s-Graveland) に乗った。スグラールフェランド戦艦はとりあえず日本へ逃走し、出島に女性と子供を下ろした。オランダ人女性は本来、出島に出入り禁止となっていたため、初めて見るオランダ人女性の風貌に日本人がびっくりしたという。ルーニウス婦人は次のオランダ船でバタヴィアに行き、そこからオランダに戻った。ルーニウス婦人の家はハールレムから遠くなかったので、帰国後、スハウテンはよく会いに行き、東インドについての昔話をしたと『東インド紀行』に記している。

また、一六五〇年代にはバタヴィアには日本人のコミュニティも存在していた。多くの日本人は兵士として東インド会社に雇われていた。一六二三年にバタヴィアの日本人市民団は東インド会社に百三十人の兵士を提供することができた⁽⁶³⁾。一六三五年の日本人の外渡航・帰国禁止令以後は、このコミュニティは孤立し、少しずつ周りの環境に同化していったが、スハウテンが滞在した時にはまだ残っており、当時バタヴィアにはハイデン (Simon Simonsz van der Heijden van Firando, d. 1673) というオランダ人の名前を授か

り、東インド会社の上司商人にまで上り詰めた日本人もいた。⁽⁶⁴⁾

3 『東インド紀行』の影響

スハウテン『東インド紀行』が幅広い一般の読者層だけでなく、知識人の間でも読まれていたことは、バーレント・ヴァン・ハーフトンの研究によって解明されている⁽⁶⁵⁾。バーレント・ヴァン・ハーフトンはスハウテン自筆の献辞が記されている現存本をハーグの王立図書館で見つけている。献辞はデ・グラルゲス (Cornelis de Graaues, 1599-1683) に宛てたものである。デ・グラルゲスはカレにおいてオランダ領事を務めた人物で、多くの知識人とも交流があった。彼のサイン帳が現存し、その中にホイヘンス親子 (Constantijn Huygens, 1596-1650 ; Christiaan Huygens, 1629-1695) 、デカルト (René Descartes, 1596-1650) 、ヴォシウス (Isaac Vossius, 1618-1689) などの署名が記載されている。また、上述の神学者ヴォシウスも『東インド紀行』を一部所蔵していたようである。⁽⁶⁶⁾

このように知識人の間でも普及していた『東インド紀行』は複数の博学書の典拠ともなった。ヴァレンティン (François Valentijn, 1656-1727) はフォリオ版五冊からなる大著『古今東インド』⁽⁶⁷⁾ において日本を含む東インドの各地域を詳細に記述している。アンボンについて記されている第二冊の冒頭でスハウテンをデ・グラーフ (Nicolaus de Graaff, 1619-1688) と共に「アンボンについて書かれ

た最も良い記述である」と評価し、一つの典拠として利用している。デ・グラーフはスハウテンよりもまして旅熱にかかり、ヨーロッパ内での旅をはじめ、アジア、アメリカ、アフリカへの複数の旅を行っていた冒険家である。死後に出版された旅行記『デ・グラーフ世界四大陸紀行』⁽⁶⁸⁾にはスハウテンの影響が窺える⁽⁶⁹⁾。

ヴァン・ブルックホイゼン (Gottfried van Broekhuizen, 1649-1712) は『珍重海陸紀行』⁽⁷⁰⁾においてメルトン (Edward Melton) の筆名で想像上の旅行記を著している。各地域についての記述は独自のものではなく、他の著者から転用したものである。バタヴィアおよびそこに住む中国人の記述はスハウテン『東インド紀行』から転載されている。同じく東インドに渡航したことのないヴァン・スパーン (Gerrit van Spaan, 1651-1711) もまた『アジア案内記』⁽⁷¹⁾でスハウテンの『東インド紀行』を利用したと明記している。その他にもスハウテンの記述を転用している旅行記が数多く存在しているはずである。バーレント・ヴァン・ハーフテンはヘッセ (Elias Hesse) やボーハールト (Abraham Bogert) もスハウテン『東インド紀行』を利用したとしているが、それらの旅行記については未確認である⁽⁷²⁾。

博学書の他にスハウテン『東インド紀行』は文学作品にも強い影響を残している。ノムス (Joannes Nomsz, 1738-1803) はその喜劇『アントニウス・ハムブルック、フォルモサの攻囲』⁽⁷³⁾の序でスハウ

テンを典拠として挙げている。この喜劇が書かれた一七七五年は『東インド紀行』の第四版が出版された年であり、その中に書かれたフォルモサにあるゼーランディア城の落城の詳細かつ印象的な記述は、ノムスが喜劇を著す動機となったかもしれない。また、スハウテン『東インド紀行』はスメークス (Hendrik Sneeks, ca1645-1721) の小説『クリンク・ケスマス王国誌』⁽⁷⁴⁾の出版されていない自筆序にも挙げられている。この多くの版を重ねた小説は、オーストラリアの無人島に漂着し、そこで救助されるまでの三〇年間を孤独に生き延びたオランダ人の青年の冒険を描いている。著者はオーストラリアで難破したオランダ船および難船者たちへの救助活動についての情報を『東インド紀行』から得た。『クリンク・ケスマス王国誌』⁽⁷⁵⁾がデフォー (Daniel Defoe, ca1661-1731) 『ロビンソン・クルソー』⁽⁷⁶⁾の典拠ではないかとの指摘もある。スメークス以外にデフォー自らもスハウテン『東インド紀行』を参考にした可能性はある⁽⁷⁷⁾。

スハウテンの影響はさらに二十世紀まで昇る。デ・ハーン (Frederik de Haan, 1863-1938) は一九二二年に出版された『古いバタヴィア』で日本人の性格について論じている際、「戦いの場では勇敢である」とスハウテンを引用し、「この発言は三世紀後に確認された⁽⁷⁸⁾」と付け加えている。デ・ハーンは恐らく日露戦争や中国侵略、シベリア出兵を暗示しているのであろう。以上のように、スハウテン『東インド紀行』は日本を含む東インドの情報源として十

七世紀から十八世紀にかけてカロンやモンターヌスと同様な影響力を持っていたと思われる。

結 論

スハウテン『東インド紀行』は十七世紀オランダの旅行文学の中で最高の水準に達している旅行記である。スハウテンは東インドへの渡航中に日記を付けて、帰国してからその日記を丁寧に編集し、自らの体験の他に、東インドの各地域についての詳細な記述を付けて加えている。また、日本についても八頁に及ぶ記述がある。スハウテンは日本に渡航したことがないが、カロン『日本大王国志』およびモンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』における日本文化の特徴をうまく要約した上で、バタヴィアで聞いた情報も盛り込んでいる。『東インド紀行』は多くの版を重ね、上述の『日本大王国志』や『東インド会社遣日使節紀行』よりも広く普及し、知識人の間でもその「正確さ」が評価され、また文学においても大きな影響力を博したので、東インド情報の普及のみならず、日本情報の普及の視点からみても重要な著作である。

附記

本稿の成るに当たって、宮田昌明が日本関係記述の翻訳作業における日本語文章作成に協力しました。妻クレインス桂子は原稿を校閲しました。あらためて感謝を申し上げます。

参考文献

- AA 1969
A. J. vander AA, *Biographisch woordenboek der Nederlanden*. Amsterdam : B. M. Israel, 1969.
- ADAMS 1983
Percy G. Adams, *Travel literature and the evolution of the novel*. Lexington : University Press of Kentucky, 1983.
- ARCHIEF NEDERLANDSE FACTORIJ
Het archief van de Nederlandse factorij in Japan. 国際日本文化研究センター所蔵マイクロフィルム。
- BÄGERMAN 1993
Ariane Baggerman, *Een drukkend gewicht. Leven en werk van de zeventiende-eeuwse veelschrijver Simon de Vries*. Amsterdam : Rodopi, 1993.
- BAREND-VAN HAEFTEN 1990
Marijke Barend-Van Haften, *Van scheepsjournaal tot reisverhaal : een kennismaking met zeventiende eeuwse reisteksten*. in : *Literatuur* 7, pp. 222-228.

- BAREND-VAN HAEFTEN 1993
 Marijke Barend - Van Haeften, Wouter Schouten : Haarlemmer, reiziger, schrijver en chirurgijn. In : *Haarlems Helicon*. Hilversum : Verloren, 1993, pp. 147-161.
- BARTHOLYN 1688
 Thomas Bartholyn, *Ontleding volgens den omloop des bloeds en nieuw gevonden wateruten*. Amsterdam : by de weduwe van Joh. van Someren, 1688. ハイスピンヌイグ大学図書館蔵。
- BAUMANN 1919
 E. D. Baumann, *Een Haarlemsche chirurgijn uit de XVIIIde eeuw*, s.n. : 1919.
- BIDLOO 1685
 Govard Bidloo, *Anatomia humani corporis*. Amstelodami : sumptibus viduae Joannis à Someren, Haereditum Joannis à Dyk, Henrici & Viduae Theodori Boon, 1685. 国蔵日本文化情報センター所蔵。
- BIDLOO 1690
 Govard Bidloo, *Ontleding des menscheliken lichaams*. Amsterdam : by de weduwe van Joannes van Someren, de erfgenaamen van Joannes van Dyck, Hendrik en de weduwe van Dirk Boon, 1690. ハンノウ大学図書館蔵。
- BONTEKOE 1646
 Willem Ysprantsz. Bontekoe, *Journal ofte gedenckwaerdige beschrijvinghe vande Ost-Indische Reyse van Willem Ysprant-
 sz. Bontekoe van Hoorn*. Hoorn : Ian Iansz. Deutel, 1646. ハイスピンヌイグ大学図書館所蔵。
- BREET 2003
 Michael Breet and Marijke Barend-Van Haeften (ed.), *De Ost-Indische voyagie van Wouter Schouten*. Zutphen : Walburg Pers, 2003.
- BROEKHUIZEN 1681
 Gottfried van Broekhuizen, *Zeldzaame en gedenckwaardige zee- en land-reizen*. Amsterdam : Jan ten Hoorn, 1681. ハイスピンヌイグ大学図書館蔵。
- CARON 1645
 François Caron, *Beschrijvinghe van het machtigh Coninck-rijck Japan*, Gestelt door Francoys Caron, Directeur des Compagnies negotie aldaer, ende met eenige aenteeckeningen vermeerdert door Hendrick Hagenaeer. in : *Begin ende Voortgang van de Vereenigde Nederlandtsche Geochroyerde Ost-Indische Compagnie*. Amsterdam, 1645. Amsterdam : Theatrum Orbis Terrarum, 1969.
- COMMELIN 1645
 Isaac Commelin, *Begin ende Voortgang van de Vereenigde Nederlandtsche Geochroyerde Ost-Indische Compagnie*. Amsterdam, 1645. Amsterdam : Theatrum Orbis Terrarum, 1969.
- DAPPER 1670
 Olfert Dapper, *Gedenckwaerdig bedryf der Nederlandsche Ost-*

Indische Maetschappye op de kuste en in het Keizerryk van Taising of Sina. Amsterdam : Jacob Meurs, 1670. フォトネンナム大学図書館所蔵。

DEFOE 1973

Daniel Defoe, *New voyage round the world.* New York : AMS, 1973.

DEFOE 1974

Daniel Defoe, *The farther adventures of Robinson Crusoe.* New York : AMS, 1974.

DEFOE 1995

Daniel Defoe, *Robinson Crusoe.* New York : Chelsea House, 1995.

EEGHEN 1961

Isabella Henriette van Eeghen, *De Amsterdamsche boekhandel 1680-1725.* Amsterdam : Scheltema & Holkema, 1961-1978. 6 vols.

FURSTNER 1985

Hans Furstner, *Geschichte des niederländischen Buchhandels.* Wiesbaden : Harrassowitz, 1985.

GOTTFRIED 1660

Johann Ludwig Gottfried, *Historische chronyck.* Amsterdam : bij de weduwe van Joannes Brouwer, en Jacob van Meurs, 1660. フォトネンナム大学図書館所蔵。

GRAAF 1701

Nicolaus de Graaf, *Reisen van Nicolaus de Graaf.* Hoorn, 1701. Reprint 's-Gravenhage : Nijhoff, 1976. (Werken Linschoten-Vereeniging 54).

HAAN 1922

Frederik de Haan, *Oud Batavia.* Batavia : G. Kolff, 1922.

HEIDEN 1675

Frans Jansz van der Heiden, *Vernavelyke schip-breuk van 't Oost-Indisch jacht ter Schelling.* Amsterdam : Johannes van Someren, 1675. フォトネンナム大学図書館。

HOOGEWERF 1952

G. J. Hoogewerf, *Journalen van de Gedenckwaerdige Reijssen van Willem Ijsbrantsz. Bontekoe.* 's-Gravenhage : Nijhof, 1952. (Werken Linschoten-Vereeniging 54).

KLEERKOOPEL 1914

M.M.Kleerkooper, *De boekhandel te Amsterdam voornamelyk in de 17e eeuw.* Aangevuld en uitgegeven door W. P. van Stockum, 's-Gravenhage, Martinus Nijhoff, 1914-1916.

KRUSEMAN 1893

Arie Cornelis Kruseman, *Aanteekeningen betreffende den boekhandel van Noord-Nederland in de 17de en 18de eeuw.* Amsterdam : P. N. van Kampen & Zoon, 1893.

LINSCHOTEN 1596

Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario.* Amstelredam : Cornelis Claesz, 1596. 京都外国語大学所蔵。

- MONTANUS 1669
 Arnoldus Montanus, *Gedenkwaerdige gesantschappen der Oost-Indische maetschappy in 't Vereenigde Nederland, aan de keizersen van Japan*. Amsterdam : By Jacob Meurs, 1669. 国蔵日本文化研究センター所蔵。
- NIEUHOFF 1682
 Johan Nieuhoff, *Zee en landreize, door verscheide gewesten van Oostindien*. Amsterdam : de weduwe van Jacob van Meurs, 1682. 国蔵日本文化研究センター所蔵。
- NIEUWENHUYYS 1965
 Rob Nieuwenhuys, *Van roddelpraat en literatuur : een keuze uit het werk van Nederlandse schrijvers uit het voormalig Nederlands-Indië*. Amsterdam : Querido, 1965.
- NIEUWENHUYYS 1973
 Rob Nieuwenhuys, *Oost-Indische spiegel*. Amsterdam : Em. Querido, 1973.
- NIEUWENHUYYS 1990
 Rob Nieuwenhuys, Bert Paasman, Peter van Zonneveld (ed.) *Oost-Indisch magazijn*. Amsterdam : Balkboek, 1990.
- NOMSZ 1775
 Joannes Nomsz, *Antonius Hambroek, of de belegering van Formosa*. Amsterdam : Iz. Duim, 1775. へイスネンダム大学図書館所蔵。
- PREVOST 1747a
 Antoine François Prévost D'Exiles, *Histoire générale des voyages*. La Haye : Pierre de Hondt, 1747-1777. 23 vols. 国蔵日本文化研究センター所蔵。
- PREVOST 1747b
 Antoine François Prévost D'Exiles, *Historische beschrijving der reizen. 's Gravenhage : Pieter de Hondt, 1747-1767*. 21 vols. 国蔵日本文化研究センター所蔵。
- PREVOST 1748
 Antoine François Prévost D'Exiles, *Allgemeine Historie der Reisen*. Leipzig : Mertus, 1748-1774. 21 vols. へイスネンダム大学図書館所蔵。
- REEDE TOT DRAKENSTEIN 1678
 Hendrik Adriaan van Reede tot Drakenstein, Johannes Casarius, Joannes Commelinus, *Hortus Indicus Malabaricus*. Amstelodami : sumptibus Joannis van Someren et Johannis van Dyck, 1678-1703 [=1693]. へイスネンダム大学図書館所蔵。
- RIETBERGEN 2003
 Peter Riebergen, *Japan vernwoord*. Hotei Publishing, 2003.
- SCHILDER 1988
 Gunter Schilder, Het cartografisch bedrijf van de VOC., in : *De VOC in de kaart gekken. 's-Gravenhage : SDU, 1988*, pp.17-45.
- SCHOUTTEN 1672
 Wouter Schouten, *Moedscheppingh op Nederlants droevige*

vgl. Haerlem : Michiel van Leeuwen, 1672. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1676a

Wouter Schouten, *Ost-Indische voyagie*. Amsterdam : Jacob Meurs en Johannes van Someren, 1676. ハレム王立図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1676b

Wouter Schouten, *Ost-Indische Reyse*. Amsterdam : Jacob van Meurs und Johannes van Sommern, 1676. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1694

Wouter Schouten, *Het gewonde hoofd of korte verhandeling van de opper-hoofs-wonden en bekenneels-brenken, van de wonden des angesichts en van de wonden des hals*. Amsterdam : Abraham van Someren, 1694. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1707

Wouter Schouten, *Voiage de Gantier Schouten aux Indes Orientales*. Amsterdam : Estienne Roger, 1707. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1708a

Wouter Schouten, *Reys-togten naar en door Ost-Indien*. Amsterdam : Andries van Damme, 1708. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1708b

Wouter Schouten, *Voiage aux Indes Orientales*. Amsterdam : Pierre Mortier, 1708. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1724

Wouter Schouten, *Voyage aux Indes Orientales*. Amsterdam : s.n., 1724. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1725

Wouter Schouten, *Voyage aux Indes Orientales*. Rouen : Pierre Cailloué, 1725. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1727

Wouter Schouten, *Verhandeling van de tegennatuurlyke gezwellen*. Rotterdam : Hermannus Kentlink, 1727. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1740

Wouter Schouten, *Reys-togten naar en door Ost-Indien*. Amsterdam : Gerrit Tieleburg en Jan 't Lam, 1740. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1745

Wouter Schouten, *Reys-togten naar en door Ost-Indien*. Amsterdam : Gerrit Tieleburg en Jan 't Lam, 1745. インスブルグ大学図書館所蔵。

SCHOUTTEN 1775

Wouter Schouten, *Reys-togten naar en door Ost-Indien*. Utrecht : M. de Bruyn ; Amsterdam : de weduwe J.J. van

- Poolsum, G.T. van Paddenburg, A. van Paddenburg, J. van Schoonhoven en Comp., 1775. 国総日本文化研究センター所蔵。
- SELM 1987
Bertus van Selm, *Een menighe treffelijke boecken. Nederlandse boekhandelcatalogi in het begin van de zeventiende eeuw*. Utrecht : HES, 1987.
- SMEEKS 1708
Hendrik Smeeks, *Beschryvinge van het magtig koningryk Krinke Kesnes*. Amsterdam, 1708. Reprint Zutphen : Thieme, [1976].
- SPAAN 1695
Gerrit van Spaan, *De Azidonische weg-wijzer*. Rotterdam : Pieter vander Slaart, 1695. トムソントム大学図書館所蔵。
- STAVERMAN 1930
W.H.Staverman (ed.), *Journael ofte gedenckwaerdige beschryvinghe van de Ost-Indische reyse van Willem Ysbrantsz. Bon-teke van Hoorn*. Amsterdam : J. M. Meulenhoff, 1930.
- STRUYS 1718
Jan Janszoon Struys, *Les voyages de Jean Struys, en Moscovie, en Tartarie, en Perse, aux Indes, & en plusieurs autres pais étrangers*. Amsterdam : aux dépens de la Compagnie, 1718. 国総日本文化研究センター所蔵。
- TIELE 1884
P. A. Tiele, *Nederlandische bibliographie van land-en volkenkunde*. Amsterdam : Frederik Muller, 1884.
- TWIST 1645
Johan van Twist, *Generale beschrijvinge van Indien*. in : *Begin ende Voortgang van de Vereenigde Nederlandsche Geootroyerde Ost-Indische Compagnie*. Amsterdam, 1645. Amsterdam : Theatrum Orbis Terrarum, 1969.
- VALENTIJN 1724
François Valentijn, *Oud en nieuw Ost-Indien*. Dordrecht : Joannes van Braam ; Amsterdam : Gerard onder de Linden, 1724. 国総日本文化研究センター所蔵。
- VARENIVS 1649
Bernhard Varenius, *Descriptio Regni Japoniae*. Amstelodami : Apud Ludovicium Elzevirium, 1649. 国総日本文化研究センター所蔵。
- VRIES 1682
Simon de Vries, *Curieuse aenmerkingen der bysonderste Oost- en West-Indische verwonderens-waerdige dingen*. Utrecht : Johannes Ribbius, 1682. 国総日本文化研究センター所蔵。

注

(一) 各地域の列挙順は『東インド紀行』での記載順通り。日本についての記述はマレーシアについての記述とシンガルについての記述の間に位置している。

(二) SCHILDER 1988 は一六〇二年と一六九九年の間に千七百五十

五隻がオランダからバタヴィアへ旅立ったと計算している。

- (3) 日文研図書館はリンスホーテン・シリーズの完全なセットを二〇〇六年度中に受け入れる予定である。
- (4) BAREND-VAN HAEFTEN 1990.
- (5) 本日の日記の終末のころには BAREND-VAN HAEFTEN 1990, p. 223 を参照。
- (6) NIEUWENHUYYS 1973, p. 19.
- (7) BONTEKOE 1646.
- (8) HOOGWERFF 1952.
- (9) ホンテナーの旅行日記の題目にも *Journal* が冒頭に掲げられて 5^o. BONTEKOE 1646.
- (10) LINSCHOTEN 1596.
- (11) NIEUWENHUYYS 1973, p. 22.
- (12) *Ibid.*
- (13) ホウマン (Cornelis de Houtman) が東インドへの最初の渡航に出航した際に『東方面函記』の手稿本を携帯していた。
- (14) MONTANUS 1669.
- (15) NIEUWENHUYYS 1973, p. 560.
- (16) BAREND-VAN HAEFTEN 1993, p. 150 以下 5^o. BAREND-VAN HAEFTEN の 聖書 と Gemeentearchief Haarlem, Inventaris van de Doop-, Trouw- en Begräafboeken, inv. nr. 10, Doopboek Ned. Herv. Kerk 1636-1639, fol. 209 などを参照した。
- (17) BAUMANN 1919, pp. 7-8.
- (18) VRIES 1682.
- (19) 日本語訳は日本聖書協会編『聖書、新共同訳』東京、日本聖書協会、一九九四年、九四八〜九四九頁による。
- (20) BAREND-VAN HAEFTEN 1993, p. 150 以下 5^o. BAREND-VAN HAEFTEN の 情報 と 「*Genealogie van de*」 *Archief Collegium Medicum*, inv. nr. 7, Naamen der Gilde-broederen van 't Chirurgijns gild begonnen met het jaar 1615; Naamlijsten van Deken en Vinders van het Chirurgijns gilde 1537-1692. などを参照した。
- (21) SCHOUTTEN 1672.
- (22) SCHOUTTEN 1694.
- (23) SCHOUTTEN 1726.
- (24) SCHOUTTEN 1727.
- (25) BAREND-VAN HAEFTEN 1993, pp. 150-152.
- (26) SCHOUTTEN 1700, 1733.
- (27) HAAN 1922, p. 109.
- (28) ヌアルスの日記の情報はころころは EEGHEN 1961, III, pp. 247-248, ヤン・ナーマンの日記の情報はころころは EEGHEN 1961, IV, pp. 128-131 を参照。
- (29) GOTTFRIED 1660.
- (30) ヌアルスと ヌアルス の 文書 と ころころは KLEERKOOPEER 1914, pp. 416-424.
- (31) MONTANUS 1669.
- (32) NIEUHOF 1682.

- (33) DAPPER 1670.
- (34) BARTHOLYN 1688.
- (35) BIDLOO 1685.
- (36) BIDLOO 1690.
- (37) REEDE TOT DRAKENSTEIN 1678.
- (38) HEIDEN 1675.
- (39) STRUYS 1718.
- (40) THELE 1884 はその他に一七〇七年版、一七五六年版、一七八〇年版を確認している。
- (41) 原本に記載されている版番号と異なる。
- (42) THELE 1884 ④ Amsterdam : T. Craijenshof, n.d.の版も確認している。
- (43) PREVOST 1747a.
- (44) PREVOST 1747b.
- (45) PREVOST 1748.
- (46) BREET 2003.
- (47) 定本として現代語版 BREET 2003 を利用した。
- (48) 將軍。
- (49) 岡崎。
- (50) 肥前の間違い。
- (51) 九州の間違い。
- (52) エル (e) は約六十九センチ。
- (53) 殿。
- (54) 明暦の大火。

- (55) 坊主。
- (56) スハウテンは「処刑人」を「自分を処刑する切腹した本人」の意味で使用している。
- (57) ダイロー＝内裏。
- (58) バカ＝釈迦。
- (59) ヒヤミス＝神。
- (60) Bonio は「番所」を表している。
- (61) CARON 1645.
- (62) MONTANUS 1669.
- (63) HAAN 1922, p. 485.
- (64) Ibid, pp. 485-486.
- (65) BAREND-VAN HAEFTEN 1993, p. 152.
- (66) Ibid, p. 153.
- (67) VALENTIJN 1724.
- (68) GRAAFF 1701.
- (69) BAREND-VAN HAEFTEN 1993, p. 156.
- (70) BROEKHUIZEN 1681.
- (71) SPAAN 1695.
- (72) BREET 2003, p. 15.
- (73) NOMSZ 1775.
- (74) SMEEKS 1708.
- (75) DEFOE 1995.
- (76) Petrus Buinders, Inleiding, in : SMEEKS 1708, pp. 51-56.
- (77) デフォォーの書齋には多くのオランダの旅行記があった

(ADAMS 1983, p. 120)。また『新世界周航』(DEFOE 1973)ではデフォーはスハウテンと同名である世界周航者 *Willem Cornelisz Schouten* (ca. 1580-1625) に似て言及している。⁸²

(82) HAAN 1922, p. 486.